

## 知事との対話(防災の現場を訪ねて) における地域のみなさんからのご意見

県では、地震や風水害などの自然災害による被害を最小限にとどめるため、防災に積極的に取り組まれている地域の現場を知事が訪問し、地域のみなさんと知事が直接対話する「防災の現場を訪ねて」を実施しています。

本資料は、地域防災力を高める取り組みを進められているみなさんからいただいた意見を抜粋したものです。



近江八幡市池田本町公民館での「知事との対話」の様子  
(H20. 4. 27)

詳細は、[県のホームページ（インターネット知事室→県民のみなさまとの対話）](#)をご覧ください。

## 1. 「彦根市河瀬駅周辺自治会のみなさん」との対話

開催月日：平成18年8月26日      開催場所：彦根市立彦根中学校

### 【出席者の方からいただいた主な意見】

- ・ 地域の財産を失わないよう、みんなが意識を高め、防災に努めることが重要である。  
住民が年中、毎日、鐘をならしながら交代で夜回りをしており、こういうことによって意識の向上につなげていくことが大切だと考えている。
- ・ 年1回、運動会をして、その中で避難場所へ走ることにより、みんなに避難場所がわかるようにしている。何かあったら、そこへ走りなさいというように。
- ・ 川瀬の婦人会で、今年は防災に力を入れることにした。さざなみ学級では京都の防災センターに行って、消火活動や、地震対策の勉強をし、勉強したことを、自分の地域や婦人会で報告していこうと取り組んでいる。
- ・ 貯水槽がないので、川をせき止めて、緊急の対応をする必要がある。

## 2. 「野洲市小南自治会のみなさん」との対話

開催月日：平成 18 年 9 月 23 日

開催場所：野洲市小南公民館

### 【出席者の方からいただいた主な意見】

- ・ 昔は堤防の維持管理を青年団が行い、堤防の竹は家庭の燃料用として入札により販売していた。堤防の草は餌として牛に食べさせていた。
- ・ 小南が水害に遭った時に、他の地域から着替えの服、缶詰などをいただいたということがあって、神戸の震災の際に支援に行こうということになった。1 回目は水を持って行って、2 回目はあったかいものと炊きだし（愛郷鍋）をして食べていただいた。神戸の震災以降、左義長の時期に行っている総合防災訓練の後に、炊き出しとして愛郷鍋をみんなで一緒に食べている。老いも若きも左義長を楽しみながら、愛郷鍋を囲んでいる。
- ・ 自主防災組織表や緊急連絡網の作成、研修、図上訓練、防災パトロールなどのほか、救急看護のための AED の扱い方についての講習会も実施した。
- ・ 義勇消防隊は、20 歳から消防団に入るまでの若い世代で、20 名程度で結成している。旧野洲町時代、消防の操法大会で 15 年ほど続けて 1,2 位となっていた。今は初期消火を目標に、いざという時のために消火栓の場所などを認知するということに重点を置いて活動している。
- ・ 女性消防隊は、消火器、消火栓の操法の訓練や、各家の玄関に置いている防火バケツの水の点検を行うほか、救命講習会、市の出初め式にも参加している。この 8 月の水防訓練では土のうづくりなども経験し、万が一の時に迅速な対応ができるよう活動している。
- ・ シルバー消防隊は立ち上げたばかりだが、若い人は昼間は働きに出ており、家にいる老人が自治会に協力させてもらっている。
- ・ 事業所、店舗などにも防災組織に入ってもらって、昼間でも初期消火ができる体制をつくっている。
- ・ 小南は災害の多いところで、災害の歴史があって、こういうつながりができている。これまでの組織を継続して行って、若い人につなげていくことが大切だと思う。

### 3. 「滋賀県男女共同参画推進協議会のみなさん」との対話

開催月日：平成 18 年 12 月 23 日

開催場所：滋賀県婦人会館

#### 【出席者の方からいただいた主な意見】

- ・ 地域には、消防団と自警団があり、常時活動をしている。
- ・ 地域のビーチバレーボール大会の前に消防訓練を行うなど、地域の方が楽しんで参加できるような工夫をしている。
- ・ 訓練は、体で覚えることが大切。何回もした方がよい。
- ・ 要援護者の個人情報の問題がある。民生委員さん、福祉委員さんには「すこやかコール」で町内のフォローをしていただいている。高齢者との日常的なつながりがあると非常時に役立つ。
- ・ 野洲市吉川では、野洲川があふれ、1 週間は堤防の上で暮らしたと聞いている。昔は、治水工事をするのに、人柱を立てた、という話も聞いた。
- ・ 私の地域では、川の掃除は、地域で事業をやっている方も参加し、みんな総出でやっている。まだ、地域とのつながりが密な地域もある。
- ・ まちづくり委員をやって思ったのは、町はそれぞれによって文化が違う。その町にあった形がある。いい町にしようと思えば提案、提言を続けていかないといけない。
- ・ 阪神淡路大震災では、被災者全体のうち、6 割が女性であった。これは、女性の貧しさを表していると思う。古い家屋に一人で住んでいたたりして、家屋の倒壊の犠牲となった。
- ・ 避難所では、男性がいるところで着替えをやむなくしなければならなかったり、女性が子どもに十分にお乳をあげられないなど、女性の人権に対する配慮が欠けていた。

#### 4. 「高島市社会福祉協議会のみなさん」との対話

開催月日：平成19年2月24日

開催場所：高島市高島支所

##### 【出席者の方からいただいた主な意見】

- ・ 社協、市役所防災課、民生委員、障害団体、それぞれがバラバラに取り組んでおり、ヨコのつながりがかけていると痛切に感じている。
- ・ ヨコの連携を広げていくこと、橋渡し役が社協の役割であると思っている。このことが今後、社協が活動していける一つの切り口であり、防災に力を入れていきたい。
- ・ 小学校と中学校にボランティアの話をしに行っている。子どもが学習をすることで、子どもからの言葉を通じて家族に呼びかけをしていける。
- ・ 社協の役割は、要援護者となられる方々の支援をすることである。福祉避難所の必要性を、災害ボランティアの研修を受けて痛感した。今後は、民生委員さんと一緒に台帳作りをしていきたい。
- ・ 防災訓練は避難訓練が中心で「逃げる」ということは意識づけられているが、「残る」という意識はなかった。「残る」ということは被災したいろんな人を守り、助けるということである。

## 5. 「日野町西大路二区自治会のみなさん」との対話

開催月日：平成19年4月22日

開催場所：日野町西大路仲出町会所

### 【出席者の方からいただいた主な意見】

- ・平成6～7年に福祉協力員を引き受けた。当時は地域での活動はあまりなく、運動会以外のまちづくりの取組はなかった。福祉活動では、社協は人の暮らしを考える中で、防災が必要ではないかと思っていた。阪神・淡路大震災がきっかけになり、被災者と交流をしようということになり、6～7人来てもらい、生の声を聞かせてもらった。
- ・防災訓練は、福祉会ではなく自治会でやるべきとの意見があったので、自治会主催、福祉会が共催ということにした。
- ・マップは平常時に人にやさしい隣組組織づくりが目的であった。地理的に一番近い家というのを意識して「組」を作った。どこで寝ているのかがわかる関係、これを隣組とした。
- ・防災マニュアルは、西大路二区で実際やってきたことをまとめた。頭の中で考えたものではなく、みんなでやりながら計画を練って、何回も見直して作った。
- ・防災マップづくりは最初から大きな地域でやろうとすると話がまとまらない。小さい集団でスタートするのがよい。数軒ではじめ一緒にやろうと広げていくのがよい。
- ・基本行動の四つ（見守りあい。支えあい。助けあい。安否確認。）を日常からやること。近所づきあいだけでなく、まず家庭の中でもやる必要がある。
- ・普段から隣近所を含めてこういう精神で活動していくことが大切である。
- ・まず自分が安全でないと何もできないので自分を守ることが大切。

## 6. 「湖南省妙感寺区自治会のみなさん」との対話

開催月日：平成19年5月20日

開催場所：湖南省妙感寺多目的集会所

### 【出席者の方からいただいた主な意見】

- ・ 妙感寺流れの起こった9月16日にお宮さんに集まり、お祈りし、皆で流れの話をする「流れ籠もり」をしていたが、今は昭和28年の水害のあった9月25日に日を変え、区内の3町がお宮さんに集まって籠もりを行っている。
- ・ 昨年9月のはじめにDIGが行われ参加した。DIGをやって、みんながびっくりしている。話だけでなく時間をかけてもDIGをやるべき。
- ・ DIGをやったら、自分の団地の消火栓がどこにあるかが書けなかった。これをやって、もっと防災を考えないといけないと感じた。
- ・ 自治会に加入していない世帯が35世帯ある。市のホームページをみると52世帯が加入していないことがわかっている。災害時は加入していない人も避難の対象になるので、妙感寺区で加入していないところを教えてほしいと市にお願いしたが、個人情報との理由で教えてくれない。また自分が要援護者であるということを教えたくないという人もいる。民生委員は把握しておられるが我々には教えてくれない。こういった人たちをいかにして助け出すかが問題である。
- ・ 工事負担金の完済後は、早く避難できるようにすることにもお金をかけようということで、1000円の積み立てを継続的にやることとしている。
- ・ 日赤奉仕団には新しい人が入ってこない。男性の方に入っていただければもっと活動ができるので入っていただきたい。
- ・ 大雨の時に水の量がどれくらい流れるか知るために雨量計がほしい。自分たちで測れる雨量計があれば、どれくらいの雨量、水量で避難しなければいけないかを知って地域に情報を流せるようにしたい。

## 7. 「近江八幡多文化共生市民ネットワークのみなさん」との対話

開催月日：平成19年8月25日

開催場所：近江八幡市 NPO しみんふくし滋賀

### 【出席者の方からいただいた主な意見】

- ・ 同じ地震が来ても、日常の生活レベルに応じ受ける被害が違う。生活レベルの低い人は影響が大きい。外人は「害人」だと見られるように思う。言葉の壁もあり避難所に行っても受け入れられるのか疑問。  
自治会に外国人が入れるようコミュニティを見直す必要がある。例えば、「自治会にブラジル人がいてサンバを教えてもらえた。」とか、「中国人がいるのでおいしい手作り餃子を食べることができてラッキー！」など、そういう形でコミュニティが考えられるとよい。
- ・ ブラジルは地震がないので学校で地震の訓練はないし地震のことは教えない。でも、日本は地震があるが、誰も地震のことを私たちに教えてくれない。地震が起これたらどうしていいのかわからない。ホームページで情報を知らせてほしい。
- ・ 外国人の子どもが日本の学校にいと、防災訓練があるので、子どもは防災について教えられる。子どもからお父さん、お母さんに防災のことに伝えてもらいたい。日本の学校に行けない人はブラジル人学校に行くが、そこで日本の文化、気候、風土など日本についてのカリキュラムを入れてもらえるようにするべきである。
- ・ 地域で婦人会の役をしている。1週間前に防災訓練をして、婦人会では炊き出しをやった。こういった訓練を外国人が働き、暮らしているところでできないかと思った。
- ・ ゴミは分けて出さないと言われても、なぜゴミを分けないといけないのかということの説明がないと分けられない。ハンディを持っている人に対しては、一般の人と同じ情報量ではダメ。多くの情報を与えて、はじめて同等に理解できる。そういう視点が大事。
- ・ 外国人登録の時に、パンフレットを渡して、避難所の場所を教えるとか、必要な情報を提供してもらえるとよい。また既に外国人登録されている方には資料を発送するなどしてもらえるとよい。さらに、よく行くスーパーマーケットや教会で情報が得られるようになるとよいし、ラジオで防災情報を流してほしい。
- ・ 多くのブラジル人は派遣会社で雇用されている。会社が責任を持って防災を啓発してほしい。県から会社に訓練をするよう強く呼びかけてほしい。
- ・ 外国人相談員をしているが、市町によっては相談窓口を設けていないところがある。是非すべての市町に窓口を設けてほしい。
- ・ 外国人に対する活動はすべてボランティアでやっている。問題が起きてもすべてボランティアまかせになっている。ボランティアに対する支援を考えてほしい。外国人と日本人が効果的に手を組んでいける仕組みを作っていきたい。

## 8. 「大津市桜馬場自治会のみなさん」との対話

開催月日：平成19年9月24日

開催場所：大津市桜馬場自治会館

### 【出席者の方からいただいた主な意見】

- ・ 町内全員が災害対策に興味をもってもらえ、成果があった。この町は、今まで災害がなかったので、危機感がなかったが、明日は我が身ということで町内の人が協力してくれた。
- ・ 近くの小さな一次避難所だと、避難時にあそこのおばあちゃんはどうなっている？というふうに気がつくが、広域の避難所ではそれができない。安否確認にはまず近所の小さな避難所に避難することが大切だと思う。
- ・ 改善点としては、避難する人は血液型などの情報を何かに書いておくとういと思う。また、昼間の訓練だったので、夜ならどうするかなど、今後そういったことを進めていきたい。
- ・ 9月17日の敬老の日に町内70歳以上のお年寄り148名に紅白饅頭を届けた。このときに、住居状況や健康状態を申告してもらってリストを作った。
- ・ 平成7年からボランティアが70歳以上の方に週一回木曜日に電話で近況などをお聞きする「ふれあいホットライン」を始めた。当初は一人暮らしと高齢者夫婦で数は多くなかったので、福祉委員と町内をまわり、電話が必要な家の電話番号を聞いてまわった。仕組みは8名のボランティアで、2名ずつが自治会館に来て電話することになっている。電話しても留守で、確認ができなかった人へは民生児童委員が訪問することになっている。また、道で出会ったとか、買い物で出会ったことなどもチェックして見守っている。
- ・ 対象の方の中には、「ぼくは町内から忘れられていないのがうれしい。」という話があった。普段、心の中のことがしゃべれないが、ホットラインだといろんなことの話ができると喜んでもらっている。
- ・ ヤングママの会はお母さんが子育ての最中であるご近所とのつきあいが疎かになる。ボランティアも参加して子育てを教え、お母さんの輪ができるようになる。子供たちの「ふるさとづくり」として取り組んでいる。
- ・ 住民へのアンケート調査の結果、平成7年から全世帯数の1/3がボランティアに関わっているということがわかった。それが、横のつながりになって、顔が見える状況が生まれ、密になってやがてみなさんの輪ができる。災害は防げないが、人の輪で少しでも被害を少なくしたい。名簿だけでなく人の顔が見えるようになって、それぞれの世代が楽しく参加できるようにすることが大切。
- ・ 今年は防災元年を呼びかけ、役員だけでなく、7割以上の町内のみなさんが防災訓練に参加していただいた。子どももリュックを背負って参加した。避難所でシートの上に座らされて初めて近所の人顔がわかってよかったということも聞いた。また、地藏盆の縁日に来てくださった人は昨年より倍以上に増えた。これは、防災訓練がきっかけで顔見知りが増え、参加する人が増えたためだと考えている。防災だけでなく、住民のふれ合い、助け合いが広がるよう次の人につなげていきたい。

## 9. 「大津市女性防火クラブ連合会のみなさん」との対話

開催月日：平成19年10月21日 開催場所：大津市消防局

### 【出席者の方からいただいた主な意見】

- ・ 地域の婦人会の会長に就任した後、自治会長から婦人消防隊設立の話があり、婦人消防隊を立ち上げたのが始まり。自分の家族を守る「自助」に共鳴し、婦人消防隊の必要性を非常に感じた。設立に当たっては自治会長にバックアップをしていただいた。
- ・ 若いお母さんの入隊が少ない。子育ての真っ最中であったり、勤めておられる方が多いので入隊されない。魅力ある防火クラブにして入隊してもらえるようにしたい。また、隊員の中にはフルタイムで仕事に出られている方もいるので、活動できる隊員数が少なくなり困っている。
- ・ 町内には新しい家、マンションが増加している。旧来からの地元の人は防火クラブについて理解を示すが、新しく越して来られた方の中にはなかなか理解してくださらない方もいる。また、新しいマンションは防火設備が完璧で、住民は防火クラブの必要性を感じておられない。
- ・ 私の自治会の自主防災組織では女性を役員にはしない。自治会長は地震が起きないと考えているので危機感の無い形だけの自主防災組織になっている。自治会の男性は防災意識が低いようなので絶対女性がいないとできないと思う。自治会長の意識を高めてもらったら、女性防火クラブができるのではないかな。
- ・ 地域の中で、防火クラブは、自主防災組織と女性消防団としての2本柱でやってもらいたい。私たちは意識して防火クラブに入ったわけではないが、入ったあとに意識が芽生えている。存在があって意識が芽生える。自主的に意識が芽生えて入るのは無理なように思う。
- ・ 多くの方はハイテクが進めば、火災から守れると思っている。しかし、最後はバケツリレー。最後は人間がやるしかないということに、立ち返ることが大切。若いお母さんに子どもを守る、家を守るという出前講座をして若い人に働きかけることが必要。

## 10. 「甲良町尼子区自治会のみなさん」との対話

開催月日：平成19年11月3日 開催場所：平成の尼子館

### 【出席者の方からいただいた主な意見】

- ・ 尼子区は高齢化率が27%であるが、団塊の世代が退職すると2～3年後には30%を超える。このときの暮らしのあり方を考えないといけないと思った。そのためには尼子の地域力を高める必要がある。その地域力とは暮らしやすい地域ということで、人と尼子区との絆を深く結んでいくことが大切。区の行事などに積極的に参加し、ご近所と幅広くつきあうことが大事。またお互いさまのまちづくりとおかげさまのまちづくりが大切だと思っている。お互いさまはわかるが、今の時代で欠けているのは感謝のおかげさまのまちづくりで、これが課題と思っている。
- ・ 尼子区250軒のうち、65歳以上の一人暮らしは20軒、65歳以上の二人暮らしは25軒で、1/4が高齢者だけの世帯になっている。民生委員として地震が起こったらどう対応したらよいか心配である。
- ・ 尼子区は、28名の福祉担当がいる。一人が10軒くらいを担当し、訓練に参加するよう1軒ずつまわった。91歳のおばあちゃんに、「生きているということを見せたらなあかんで」と言って話をした。また、「あの人が参加するなら、わたしも行くわ」ということで、高齢の方も訓練に参加してくださった。
- ・ 炊き出しも予め準備しておくのではなく、その日の朝にやってほしいと頼んだ。訓練内容は、90人が15分ずつ、消火訓練や介護、心肺蘇生法などの6つのコーナーを体験しながら移動し、1時間半ですべての体験ができるようにした。熱心な方から1コーナー15分は短いという意見をもらった。また、コーナー数を少なくして、中身の濃いものにしてほしいとの要望があった。
- ・ 若い人に如何に参加してもらうかが課題。万が一の時には、若い人たちが一番の力になる。もう一つは、本当にお年寄りの方は訓練に参加できないということ。訓練で万が一何かあったらどうするのかという意見があり、去年は躊躇した。しかし、今年は参加してもらおうということになった。実際に災害が起こった時は、そういう人たちを優先的になんとかしないといけない。
- ・ 訓練後のアンケートでは、訓練はよいことなのでやれとか、自分から率先してできないが、訓練があれば、参加するという意見が多かった。楽しく参加できる訓練、知らず知らずのうちに身につけられる訓練を念頭においてやっており、楽しく、義務ではなく、自ら参加しようと思えることが大事だと思う。
- ・ 去年は子どもが参加して何をするのかという意見があったので、今年はバケツリレーをすることにした。小中学生は熱心に参加する。公民館で世代間交流をしており、鮎の放流や塩焼きをしたり、また臼で餅つきをして子どもが参加できるようにしている。しかし高校生は参加しない。また青年団、婦人会は忙しいので参加は難しい。
- ・ 訓練は町内でも尼子だけがやっているくらい。町や他の区とのつながりも大事なので、関係機関との連携をすすめていきたい。
- ・ 昨年、京都の防災センターや神戸の人と防災未来センターに行った。是非滋賀県にも災害を体験できる研修施設、防災センターがあるとよいと思う。
- ・ 65歳以上の人には自信をもって地域に貢献する若い人を育てることが一番大切だと思う。最近、区の役が当たるのが嫌で町へ出て行く若い人がいるので、そういう若い人（子）に親がどのように対応するかが大切。村のことはプライバシーではなく、お互いさまだと思っている。村の中で生きるということはみんなに看取られて死ぬ、看取られて生きるということをしっかりと子どもに教えないといけない。

## 1.1. 「ファミリーハイツ草津町内会のみなさん」との対話

開催月日：平成19年12月23日 開催場所：ファミリーハイツ草津

### 【出席者の方からいただいた主な意見】

- ・ 当初、隣近所の人がわからなかったが、町内会長をして、わかるようになってきた。隣近所がわかるようになるには、10年はかかる。管理組合と町内会の関係としては、設備、インフラなどのハードの部分は管理組合、人にかかるソフトの部分は町内会というように役割を分けている。これからの世代にいかに関承していくかが課題。
- ・ 以前に主人が町内会長をやり、私が高齢者を担当する役を賜った。しかし、隣の人もわからないし、老人や身体障害者の方がどこにいるかわからず、440軒を一軒ずつ訪問して「老人クラブをつくりませんか、入りませんか」と声をかけた。しかし、「私たちは、気楽になるためにマンションに来たのに老人クラブには入らない。」と言われた。民生委員をするのに住民の顔も知らないわけにはいかないので、老人クラブ作ろうとしたが、「私たちは老人ではない。」とも言われ、「老人クラブ」という名前も使えなかった。みなさんに聞いたら、将来もあり、悠々と生きるということから、「ゆうゆうの会」という名前にした。月に2～3回集まるようになった。
- ・ 子供会と分団という草津第二小学校の第4ブロックの担当をしている。昼間はマンションに母親しかいないので、何かあった時は、お母さんの力が必要になる。そのために、子供会であったり、分団であったりして、お母さんのつながりができるようなことができればよいと思っている。
- ・ 役員の多くは1年で辞めるので、役のつながりができない。そのため、過去の経験者に集まっていただけるよう、イベント、同期会などの場、仕掛けをつくりたい。
- ・ 草津駅の西側と東側では、多くのマンションができていることから、他のマンションで防災についてどのようにされているのか実態や取組の情報を教えてもらいたい。よいところがあれば、その事例をワーキングに取り込みたい。逆に聞かれたら、教えてあげたい。相互連携で情報交換や取組ができればよい。
- ・ 子どもを通じた横のつながりはできたが、災害時は縦のつながりが重要。日常生活でのゴミ出しなど子どもが地域の人の手伝いができるような体制が必要。
- ・ 役に当たれば仕方がない、できればやりたくないというような住民層に、町内会、管理組合はこんなことをやっているということを見せられるようなポスターを作っていきたい。
- ・ 昼間は女性、お母さんが一番多くいるので、お母さんに防災について考えてもらいたい。分団の研修会の一コマとして訓練をやれば、みなさんの意識も変わるのではないか。また、子どもでもら、6年生になれば力もあるので、子どもなりにできることをしてもらい、子どもたちの力を十分に使いたい。

## 1.2. 「前 NPO 法人日野川を見守る会のみなさん」との対話

開催月日：平成 20 年 4 月 27 日

開催場所：近江八幡市池田本町公民館

### 【出席者の方からいただいた主な意見】

- ・ 昔は利水の川であったし竹も刈っていた。きれいで魚の獲れる川であったが最近では子どもを川へ近づけない。排水の川となってしまった。これからは親しみの持てる川にしていきたい。
- ・ 子どもが川で遊んでいる事もあるが、親としては危ないと注意してしまう。あまり遊ばせたい場所ではなかった。川が身近になって、癒しの場所になればよい。
- ・ 田んぼで 3m の浸水があっても旧来の家屋には水が入らない。家屋は、浸水の時でも仏壇までは水が入らない造りになっている。集落には舟が 2 艘あり今でも大事に守っている。
- ・ 堤防沿いの新興住宅へ引っ越してきたが、その時には「水が吹く」「水がつく」という言葉がわからなかった。今は、自治会で全戸を対象に水害時等における避難困難者名簿を作成し、これによって自力で避難できない方を優先的に避難させることとしている。
- ・ 堤防が切れた時は上流へ逃げるな。現場から下流の者はその場においても良いが、切れた所から上流の者は気をつけろと言いつけられている。堤防が切れると、水流が渦を巻くため、上流へ上流へと堤防が切れる。
- ・ 堤防の外側にお地藏さんがあり、お地藏さんが浸かると危ないといわれている。大雨の時には見に行って避難の目安とする。先人の知恵です。
- ・ 昔は各地で鐘を打ち、避難情報を伝えていた。